

聖書：ルカ 20：27～40

説教題：生きている者の神

日時：2012年10月28日

このところ、イエス様にエルサレムの指導者たちが論争を仕掛ける話が続いていますが、今度はサドカイ人たちが土俵に上がって来ます。聖書には他に「パリサイ人」が良く登場しますが、彼らは平民の出身で、ユダヤの宗教に熱心な、信仰に厚い人たちと人々から尊敬されていました。その一方、サドカイ人たちは裕福な貴族階級出身の人たちで、どちらかと言うと人々からの人気はあまりない人たちでした。最初の 27 節に「復活があることを否定するサドカイ人」とあります。彼らは物質世界だけを受け入れ、死後のいのちや最後の審判、天使や悪霊の存在などは拒否する立場を取りました。使徒の働き 23 章 8 節にも「サドカイ人は、復活はなく、御使いも霊もないと言い、パリサイ人は、どちらもあると言っていたからである。」と記されている通りです。

そんなサドカイ人が、イエス様に挑戦するために選んだテーマは、まさに彼らが主張する「復活はあり得ない」というものでした。彼らは 28 節からモーセの言葉を引用しますが、それは申命記 25 章 5 節から 10 節の内容を正しく述べたものです。ある夫婦に子どもが与えられないまま夫が死んでしまった場合、その夫の兄弟が残された妻をめぐって、子どもをもうけなければならない。そしてその名がイスラエルから消し去られないようにしなければならない、という規定です。私たちはこの具体的な適用例を、ルツ記の物語などに見ることができます。そんな旧約聖書の一節を取り上げて、サドカイ人たちは特殊なケースを想定します。29 節から 33 節：「ところで、七人の兄弟がいました。長男は妻をめぐりましたが、子どもがなくて死にました。次男も、三男もその妻をめぐり、七人とも同じようにして、子どもを残さず死にました。あとで、その女も死にました。すると復活の際、その女はだれの妻になるでしょうか。七人ともその女を妻としたのですが。」確かにこれは大問題です。7 人の兄弟はただ聖書の教えに従って行動しただけなのに、その結果、天国では一人の妻をめぐって兄弟喧嘩をしなければならない。これは不合理だ。だから復活などありえない！とサドカイ人たちは主張したかったのでしょうか。

そんな彼らにイエス様は答えられました。34 節から 36 節：「イエスは彼らに言われた。『この世の子らは、めとったり、とついたりするが、次の世に入るのにふさわしく、死人の中から復活するのにふさわしい、と認められる人たちは、めとることも、とつぐこともありません。彼らはもう死ぬことができないからです。彼らは御使いのようであり、また、復活の子として神の子どもだからです。』」サドカイ人たちは、復活後の世界は、それがあつたとしても、今とそれほど変わらないもの、今の延長のよう

なものと考えていました。しかしイエス様は、やがての生活は今の生活と大きく違うと言っています。そしてその違いの一つとして、結婚関係はなくなると言われました。これは初めて聞いた人にはビックリする教えかもしれません。特に幸せな結婚生活を送っている夫婦にとっては非常なショックかもしれません。自分たちは永遠に夫婦でいられると思ったのに、天国ではそうでなくなるの？いつまでも二人は愛し合って生きられると思ったのに、天国では別々の関係になってしまうの？と。反対にある人はこれを聞いて、これでいつか今の伴侶から解放される！と胸をなでおろすかもしれません。それにしてもどうして天国では、結婚の制度がなくなるのでしょうか。イエス様は36節で「彼らはもう死ぬことができないからです。」と言っています。この世では結婚して子どもが生まれないと、人類は絶えてしまいます。「生めよ、増えよ、地を満たせ。」という創世記にある命令は、結婚の制度を通してこそ実現されます。しかし天国では死がありません。だからめとることも嫁ぐことも必要なくなる。

ある人はこれを聞いて、結婚はそんなことのためだけにあるのだろうか。結婚は二人が互いに愛し合い、支え合って、神の栄光を現わすためにあるのではないか、と言うかもしれません。確かにその通りです。しかし天国では神の十分なお臨在があつて、一人一人は神に結びつき、十分な満たしが与えられるので、伴侶がいなくては孤独になるということはないのです。結婚式に良く読まれるエペソ書5章の夫婦に関する教えにおいても、32節で、結婚はキリストと教会の関係という「奥義」を指し示すものと言われています。今の結婚関係は、将来のキリストと教会の関係を指し示すものであり、そのキリストと教会の関係が最終的な完成に至ったなら、結婚は不要になるのです。

これは願いつつも独身の人、あるいは願わずして結婚生活が破綻に陥った人にとって、特に貴重な教えでしょう。しばしばクリスチャンは結婚を強調します。確かにそれは重要なテーマの一つです。しかしこのイエス様の言葉から教えられることは、結婚が人間にとっての最大の目的ではないということです。結婚は地上で歩む弱い私たちを支えるために神が与えてくださった補助手段であり、やがての天国に行った時には、それをはるかに上回る祝福が、そこに入るにふさわしいと認められた人、すなわちイエス・キリストを信じて義と認められた人に備えられているのです。

またイエス様は、次の世に入った人は「御使いのようであり」とも言われました。36節を良く見ると、これは「もう死ぬことができない」という状態を説明する言葉として語られています。特に注目すべきは、ここで単に「死なない」と言われているのではなく、「死ぬことができない」と言われていることです。すなわち死の可能性が全くゼロということです。この世では常に死が私たちを威嚇しています。どんな幸いを

味わい、喜び楽しんで、必ず死が自分にやって来ます。私たちも死にますし、私たちの愛する人も死にます。この死すべき運命にあることが、私たちの人生を結局悲惨なものにします。しかしやがての世界は「もう死ぬことができない」世界。天国では死の脅かしが一切ないのです。死の影がちらつくことのない、どこまでも明るい神の光の中に歩むのです。これこそ本当の意味での満ち満ちた命でしょう。

そしてイエス様はその時の私たちのことを「復活の子として神の子どもだからです。」と言っています。私たちはイエス・キリストを信じることによって、今すでに神の子どもです。しかしそのことは今ははっきりは良く分かりません。クリスチャンである人とそうでない人を見て、本当にそのような違いがあるかどうか、一目瞭然ではありません。しかしやがての日にこそ、神の子どもとされた人たちの栄光がはっきり現れます。ローマ書8章19節と21節にも、やがての日は神の子どもたちの現れの日と言われています。つまり復活を経たやがての日に、私たちが神の子どもとされている本当の特権と祝福がはっきり現わされるのです。そしてこの地上の生活からは想像できないような、神が備えてくださった豊かな神の子どもの生活へ導き入れられるのです。

さてこれまでは復活後の世界はどんな世界であるかについて語られましたが、イエス様は続けて、より根本的な問題、すなわち復活は本当にあるのか、について語って行かれます。37節と38節：「それに、死人がよみがえることについては、モーセも柴の箇所、主を、『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、このことを示しました。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。というのは、神に対しては、みなが生きているからです。」 イエス様がここで取り上げたのは、旧約聖書の中でも有名な、あの燃える柴の中から主がモーセに語り掛けられた出エジプト記3章のみことばです。神はそこでご自分を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と言い表されました。これの一体どこが、死人のよみがえりを証明しているのでしょうか。言うまでもなく、主がモーセに語られた時、アブラハムやイサクやヤコブはこの世にいませんでした。その彼らが死んで、もし滅びてしまっていたなら、神がご自分を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と言い表したことはナンセンスになります。神は死んだ者の神となります。しかし主なる神が、彼らの死後も、「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と言われたのは、実は彼らがなお生きている者たちであるからです。

38節後半に「というのは、神に対しては、みなが生きているからです。」とあります。一見分かりにくい言葉です。ここの「みな」とは、もちろん「全員」という意味ではありません。これは直前のアブラハム、イサク、ヤコブを指し、さらには35節の

「次の世に入るのにふさわしい」と認められたすべての人を指します。その人たちはみな、「神に対しては生きている」とはどういう意味でしょうか。それはたとえ人の目には死んでいるように見えても、神に対しては生きている、ということです。アブラハムもイサクもヤコブも、人間の目で見ると、どこにもいません。すでに死んでしまい、滅びたようにも思えます。しかし人には分からなくても、神との関係においてはみなが生きている。命を与え、支えられる神が、地上の私たちの感覚では測り得ない仕方で、彼らを生かし、守っておられるのです。ここに地上の死はそれで終わりではないこと、神はご自身との正しい関係にある者を、その人が地上を去った後も、祝福の内に生かして下さっていることが示されています。そしてその霊において生きている者たちに、神はやがて新しい体を与えて復活させ、35～36節で語られた、次の世の生活、天国の生活へ導き入れてくださるのです。

私たちはこの御言葉を通して何を思うでしょうか。主はアブラハム、イサク、ヤコブが地上を去った後も、わたしは彼らの神であると言われ、彼らを守り、支えてくださいました。ここから思うことは、私たちより先に天に召された兄弟姉妹についても、これは当てはまるということです。ある人は先に天に送った伴侶のことを思うでしょう。ある人は愛する家族のことを、またある人は親しかった友人を、あるいは恩師を、あるいは教え子を、その他、様々な地上を去った愛する人のことを思うでしょう。しかし今日の箇所から確認することは、その人たちはただ死んで、地上からいなくなってしまったのではないということです。神はなおその一人一人の神でいてくださり、その方々は神に対してはみなが生きている。そしてかの日には復活し、神の子どもたちの栄光に入れられる。もはや死ぬことができず、めとることも嫁ぐこともなく、それをはるかに超えた神との永遠に祝された交わりのいのちへと導かれるのです。

そしてこれは私たちにも言えることです。私たちも地上の人生を終えて、みなやがて死を迎えます。今の地上の人生は、その最期の日に向かう一日一日とも言えます。しかしイエス・キリストにあつてご自身との関係に生きるように招いてくださっている神を私の神として持つなら、この地上で死を迎える日が来ても、神が「私の神」、また「あなたの神」となってくれる。人間の目では死んで消えてしまったように見えても、「神に対しては生きている」者とされる。そしてやがて神の子どもたちとして復活の栄光の中に入れられます。その復活後の世界は、今の地上の生活からは推し量れない世界です。死の威嚇が全くなく、一人一人が神に結び付き、十分な満たしを受け、「御使いのよう」とまで言われる天的な祝福に生きる。神はその世界を、次の世に入るのにふさわしいと認めた人、イエス・キリストを信じて、ご自身との正しい関係に立ち戻る人すべてに備えておられるのです。